発達理論の学び舎

Back Number: Vol 53

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1041. 長き冬の時代を終えて

1042. 母国と自己の変化

1043. 書物の到来と社会思想への関心

1044. 自己を貫くテーマから始めること

1045. 春の到来がもたらす無意識の状態

1046. 千変万化する身体状態から

1047. 有限なものの価値と真の無限性に向かって

1048. 構造主義と集合的な認識の枠組み

1049. 言語の彫琢と精神の陶冶へ向けて

1050. 自分の言葉で文章を書くということ

1051. 専門性の確立と日記について

1052.「情報肥満」と「前超の虚偽」

1053. 明瞭な意味と意義に向けて

1054. 学会と権威との向き合い方

1055. 春のとある一日から

1056. 楽譜の到着と今後の研究へ向けて

1057. 筆写と投影

1058. これまでの七年間の回想

1059. 自己の基底

1060.「永遠が作る回帰の道」と「回帰が作る永遠の道」

© YOHEI KATO 2018

1041. 長き冬の時代を終えて

修士論文の原稿を読み返すことは、本日の最優先課題であった。しかし、気づいてみると、午後四時を過ぎてもまだその仕事に着手していない。夕食の時間が近づき始めた頃、ようやく自分の心がそれに取り組むべき時期を迎えたのだと知る。何事でもそうだと思うが、「期が熟す」というのはとても大事な考え方のように思える。

振り返ってみると、これまで私は、期が熟すよりも早く着手してしまったばっかりにものにならないことが多々あった。一方で、自分の人生の中で、その時期に相応しい課題と関心事項に出会うという幸運を得ていたのも確かである。何を隠そう、今私がオランダで探究生活を送っていることは、それをするに相応しい時期が私に訪れたからだと思うのだ。それが一年早くてもダメであり、一年遅くてもダメだったと思う。

フローニンゲンもようやく春を迎えたようであり、新たな季節の到来とともに、自分の内側にも少しばかり変化が見られる。長い冬の時代、私の意識は常に自分の内側に向かっていたように思う。それは単純に寒く鬱蒼とした環境のせいだとは言えないが、今の私の生活環境が思考を常に内へ内へと内省的に向かわせたのは間違いない。長い冬を経験している最中、絵も言われぬ孤独感に苛まれる瞬間が何度かあった。

義務教育を終えて以降、人との接触を極力避けるような生活態度が私の中に醸成されつつあったことを考えると、ここで言う孤独感が、単なる人との会話や接触を意味しないことは明らかである。だが、筆舌に尽くしがたい孤独感が私を時折襲うことがあったのは確かだ。それはおそらく、社会的に構築された自己から完全に脱却した際に起こる、これまで身に纏っていた衣を剥ぎ取られるような寂寥さを伴う孤独感であり、最後の最後に拠って立つものは結局自己の一点であるという気づきから生まれる孤独感であった。

時折訪れるそうした孤独感と向き合いながら、私は冬の時代を一日一日過ごしてきた。ある時から、そうした孤独感がいつの間にか消失し、自分がまた違う場所に到達したのだということを知った。その過程で、自分の内側に固有な現象を外側に形として表現していくことの意味と意義を見出したことは極めて大きなことであった。今年の冬に、再び新たな質を伴う孤独感が生まれてくるかもしれな

い。その時、その孤独の質はこれまでにないほど深いものになるだろう。それでも何とかその場に立ち続け、歩き続けたいという透徹した意思が自分にあることを信じたい。

春を迎え、内側に向かっていた意識が外に向かい、それはこれまでとは違う円弧を描きながら自分の内側に戻ってくるかのようであった。2017/5/7

1042. 母国と自己の変化

引き伸ばしていた修士論文の修正もいざ取り掛かってみると、思いの他に納得のいく形で修正を終えることができた。文章というのは寝かせれば寝かせるほど、新しい気づきが得られるものである。また、新しい気づきを得れば得るほど、文章全体がさらに成熟の方向へ向かっていくから不思議である。無事に原稿の修正を終えた私は、論文アドバイザーのサスキア・クネン教授にそれを送付した。

ちょうど先日のミーティングの前に、先生の息子さん夫妻に女の子が誕生したという嬉しい知らせを受けた。先日のミーティングの冒頭ではお孫さんの話で持ちきりだった。そして、今回のミーティングの前には、フローニンゲン大学での私の二年目の所属先が決定し、推薦状を書いてくださったクネン先生にその報告をメールに添えておいた。火曜日のミーティングが終われば、先生とのミーティングも残すところ後一回ほどになる。

当初、オランダでの生活は一年間を予定していた。しかし、フローニンゲン大学で得られるもの、またオランダでの生活を通してしか得られないであろうことの深さに気づいた時、少なくとも三年間はこの場所で生活をしようと思った。それが実際に実現することになり、今はとても嬉しく思う。これから後二年間ほどの時間をこの場所で過ごせることは、私の人生における極めて貴重な精神的財産になるだろう。二年後にどこの国で生活をし始めるのか今の私にはわからない。これからの私の人生において、少しばかり母国以外での生活が長くなりそうだ。

米国で過ごした四年間、そしてオランダでの一年間の日々の間、私は母国を離れていたにもかかわらず、日本の変化が母国にいる時以上に敏感に感じ取れているような気がする。もちろん、日本で具体的に何が起こっているのかを詳細に理解することはできない。しかし、日本が全体として向かおうとしている動きや集合的な意識の変化のようなものが、日本で生活をしていた時に比べて、よ

り明確に自分に知覚されるようになっている。仮に変化というものに気づくためには、変化を起こしている対象から外に出てみなければならないのであれば、そうした事態も了解できる。

日本にいながらにして日本の精神的動態を掴むことは並大抵のことではないのだろう。私がそれを掴むためには、日本の外に出てみるということがやはり必要であった。それはもちろん身体的な次元での話のみならず、精神的な次元で日本の外に出てみることをしなければならなかった。さらにもう一つ、忘れてはならないことがある。

それは、日本における変化が私自身の変化と密接に関わっているということである。それは私自身の変化によって、日本の変化をより認識できるようになってきたという一方向的なものではなく、日本における変化が紛れもなく私自身の変化に影響を与えているという双方向的なものである。まさに、母国の存在は、私にとって変化の母体であり続けているのだ。そうであるならば、これまで以上に、母国の精神的変化に対する積極的な関与を私は行っていく必要があるのかもしれないと思えてきた。2017/5/7

1043. 書物の到来と社会思想への関心

昨日、非線形時系列データ解析の専門書に目を通していると、これは今腰を据えて読むべきものではなく、数年後に読むべきものだとわかった。近い将来に必要なものが今私の手元にあり、そこに少しばかり足を入れようとしている自分に対して可笑しくなった。どうやら私は、数年後に探究を深めていくことになるテーマの書籍を今購入していたのだ。これはとても不思議なことであり、振り返るとこれまでも同じようなことが度々起こっている。

実際に、過去に購入した書籍が今必要になっており、それらを現在読んでいるという状況がある。一冊の書籍が自分の目の前に現れることに関するこの時間差をどのように説明したらいいのだろうか。もはや私は何かを知っているのかもしれない。今の私は将来の私と繋がっており、その存在がそれらの書籍が近い将来に必要であるということを現在の私に知らせているかのようなのだ。これは夢と同じぐらい不思議な体験であり、それが意味することをなかなか掴むことができない。

昨日は久しぶりに、書斎の本棚から社会学に関する専門書や社会思想に関する哲学書をパラパラと眺めていた。以前から少しずつこの予兆が見え隠れしていたのだが、どうやら私は個人の思想の

みならず、ようやく集団の思想に関心を持ち始めたようだ。これも昨日の日記の言葉で言えば、期が熟し始めたと言えるかもしれない。個人の思想体系がどのように構築されていくかだけではなく、集団の思想体系がどのように構築されていくのか、そして集団の思想病理の発生とそれが個人の思想に与える影響に対して強い関心を持ち始めたのである。

一昨年、東京に滞在していた時に、そうした関心の芽生えがあったように思える。しかし、それらの芽は開花することなく、しばらく土の中で眠っていたかのようだった。外側の季節が春を迎えたことに伴い、私の内側でもそのような関心事項の芽が外側に生まれ出てこようとしているようだ。欧州での生活は、否が応でも私の関心を集団意識に向けていく。

米国では、サンフランシスコ、ニューヨーク、ロサンゼルスで生活を営み、それらの都市は確かに人種として多様性に溢れていた。しかし、それ以上に、欧州での生活の方が民族の多様性を私に感じさせる。民族ごとに異なる発想や欧州各国の政治思想に関する話題が、友人や教授陣たちとの何気ない会話の中で出てくることに伴い、徐々に私の中で、個人を超えた集合意識なるものについて考えを深めていく必要があるという思いが強まっている。

早朝の習慣として、朝一番の仕事は哲学書に取り組むことにしているが、そこで読むべき書籍の一つとして、集団意識や社会思想に関するものを織り交ぜていきたい。2017/5/8

1044. 自己を貫くテーマから始めること

この数日間ほど、少しばかりベートーヴェンのピアノソナタを離れている。その代わりに、今日は早朝から、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスのピアノ協奏曲を聴いていた。とりわけ、ブラームスのピアノ協奏曲に対して息を呑む瞬間が度々訪れた。こうした体験を体験として片付けるのではなく、そうした感覚を引き起こす根源的なものを掴みたい。

そこに美の本質や美の創出に関する鍵が存在していると思うからだ。自分を掴んで離さないものの奥には、必ず重大な何かが潜んでいるのだ。それは非常に個人的なことでありながら、それは人間に普遍的なものにつながることだとも思う。そのようなことを思いながら、つくづく個人を貫くテーマのようなものがなければ、内側のものを外側に形として表現しても全く意味はないという考えが浮かんできた。

自分を掴んで離さないようなテーマから出発し、そのテーマとわずかばかりも離れることなく表現活動に従事していく必要がある。自分を貫くテーマと離れてしまった表現物は、生命感が全くないのだ。個人を貫く固有のテーマは、内側の思念や感覚を生きた形で外側に表現するための核であり、それを欠く場合、表現物が死物と化してしまう。これは探究活動においても全く同じである。

他者とテーマが共鳴することは起こりうるが、他者のテーマを表面的に追いかけているだけでは何も始まらない。そのようなことをしていては、探究が深まることは断じてない。探究の出発点は、徹頭徹尾、自己を惹きつけてやまないテーマでなければならない。自己を貫く固有のテーマは、探究の出発地点であるのと同時に、自分自身の思考や感覚を通じた探究活動の中継地点になり、帰還地点になる。

自分のテーマから出発し、自分のテーマを経由し、自分のテーマに帰っていくことが何より大切だ。他者のテーマがそのプロセスに入り込んでくるのは避けようがなく、かつそれは不可欠なのだが、他者のテーマに囚われていては決してならないのだ。そのようなことを激しく思う。

午前中、ピアジェの書籍を読み進めている中で、ピアジェが、アルフレッド・マーシャル、ジョン・メイナード・ケインズ、ヴィルフレド・パレートなどの経済学者の理論に触れていたことに少々驚いた。同時に、タルコット・パーソンズをはじめとした、社会学者の理論にも関心を持っていたピアジェの姿を初めて目撃した。そこから、ピアジェが洗練させた「発達的均衡」という概念は、経済学における均衡理論や社会学における社会的均衡理論に着想を得たものだということがわかった。

経済や社会の発展過程には、個人の発達プロセスに見られる均衡現象が等しく見られる。均衡の生成過程と均衡の崩壊過程は今の私の強い関心事項でもあり、昨日眺めていた専門書の中に、上記で取り上げた学者のほとんどの名前が掲載されていたことに気づく。ピアジェは、それらの学者の仕事を叩き台にし、自らの発達思想を打ち立てて行ったのだ。

私がそれらの学者に関心を向け、ピアジェもそれらの学者に関心を向けていたというのは偶然であり、必然だろう。自分のテーマから出発した際に、まさにこうしたことが起こり得るのだ。そのことを強く実感させてくれる出来事だった。2017/5/8

1045. 春の到来がもたらす無意識の状態

昨夜は、いつもより少し早く就寝しようと思った。就寝前に「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースで取り上げられている論文を読んでいたのだが、その内容がほとんど頭に入ってこないほど、自分の内側が飽和状態にあった。内側で何かが膨れ上がっている時は、無理をしてはならない。そのため、昨夜は普段より少しばかり早く寝室に向かった。

夜の十時になろうとしているのに、辺りはまだ完全に日が沈んでいなかった。今から寝ようとしているのに日が落ちていないというのは、何だか妙な気がするが、これがオランダのサマータイム中の姿だということを思い出した。内側の飽和状態を鎮めるかのように、心と身体を緩め、天井を見ながら考えるともなく何かを考えていた。

六時過ぎに起床してみると、辺りはすっかり明るかった。暗い時間が短くなり、明るい時間が長くなったにもかかわらず、自分の内側はそれほど明るく感じなかった。季節の変わり目のせいだろうか、身体が鈍重な感じがする。それが心のあり方に影響を与えているようだ。

昨夜の夢をまだ覚えているので、覚えている範囲のことを書き留めておく。有り難いことに、第二弾の書籍の出版に際して、本書を説明するセミナーのようなものを東京で開くことになっていた。いつもであれば、セミナーで用いる資料を前もって作成するのだが、今回はそれをしなかった。というよりもむしろ、資料の作成を引き延ばしにしようとする意識が私の内側に働いていたのだ。

この裏には、「誰が自分の話を聞きたいと思うのか（誰も聞きたいと思わないだろう）？」という反語文が私の内側にこびり着いていたことと、そこから派生して、「話の上手い主催者の一人の方と対話形式で進行させていった方が、聞き手にとって有益であるに違いない」という考えがあった。しかし、そうした考えに対して何とか反抗を企てる形で、夢の中の私はセミナー会場に到着し、セミナーが開催される直前の一時間で資料を作ることにした。当然ながら、そのような短時間で納得のいく資料を作ることができず、結局、未完成のままセミナーを開始することにした。

最初に自分の書籍のタイトルを述べようと思っても、まだ正確にタイトルを覚えておらず、文言を確認しながらタイトルを読み上げた。その後、合計で二時間ほどのセミナーを行った。セミナー終了後、主催者の方と参加者の方から、内容に対して非常に好意的なコメントをもらった。しかしながら、当

の本人は何を話したのかを全く覚えておらず、手元の資料を見ようとすると、資料が全て消えていた。

昨夜見た夢は、大方そのような内容だった。細かな描写を削除したが、実はそのセミナーが開催される二時間ぐらい前は、まだオランダにいて、論文アドバイザーとミーティングを行っていた。セミナー開始の二時間前にセミナーをキャンセルするか迷ったが、それは人道に反すると思ったので、オランダから東京に一時間以内で到着できる地球の地下道を通って無事に東京に到着した、という描写があった。

昨夜の夢を改めて書き出すことによって、各々のシンボルが自分にとって何を意味しているのかが見えてくる。シンボルが持つ意味のさらに深い意味についても、夢の内容を振り返っているとそれらが見えてくる。昨夜の夢が全体として何を物語っているのかを理解しようと努めると、自分の今の精神状態がわかるだけではなく、過去から現在にかけて横たわる私の深層意識の特徴についても徐々に理解することができる。

夢を書き出すことによって、全身の鈍重さがかなり和らいだ。今日はこれから論文アドバイザーのサスキア・クネン教授とのミーティングがあり、その他にいくつか小さな仕事をこなす必要がある。一年目のプログラムが完全に終了する六月半ばまでは、気が休まることはなさそうだ。2017/5/9

1026. SSGに関するワークショップを振り返って

人間の身体は非常に不思議である。いつも私は起床した瞬間に、その日の身体状態の初期値を意識的に把握するようなことをしている。これは一つの習慣である。起床直後、どのような質と量の身体エネルギーが自分の内側にあるのかを確認し、朝の習慣的な実践に入るというのが一日の流れである。

今日は正直なところ、身体エネルギーの質と量ともに、あまり好ましいものではなかった。実際には、若干淀んだ重苦しいエネルギーが私の身体の内側に流れていた。そのような状態であっても、午前中には論文アドバイザーのサスキア・クネン先生とのミーティングがあったため、否が応でも外出をしなければならなかった。自宅の外に一歩踏み出してみると、少しばかり自分の身体エネルギーの質と量が変化したことに気づいた。

そして、キャンパスに向かって歩けば歩くほどに、身体エネルギーの状態は肯定的な方向に推移していったのである。五月も第二週目に入ろうとしているのに、朝夕は相変わらずマフラーを巻いている。しかし、その寒さは凍てつくようなものではなく、とても心地の良いものに感じる。近所の運河を架ける橋を渡ったとき、私はこの土地であと二年間ほど生活をすることになるのだ、ということに改めて思いを巡らせていた。

運河の岸に結び付けられた船を眺めながら、「私もこの土地に結び付けられたのだ」ということを思った。これはとても肯定的な意味においてである。運河を眺め、そこに停泊する船を眺め、フローニンゲンの空を眺めると、この土地にもうしばらく残れることに対して、とても有り難い気持ちになった。キャンパスに到着する直前に通過するノーダープラントソン公園も、まさに私を常に支えてくれる存在だ。

この一年間、文字どおり、雨の日も風の日も、晴れの日も雪の日も、私はこの公園を歩いてきた。そうした足取りは、もはやこの公園内には残っていない。しかし、その足取りが自分の内面世界の中に確かに刻まれているということが、とても尊いことに感じた。これからさらに二年間、私はこの公園を歩き続けるだろう。

それがどのような一日であろうと、どのような足取りであろうと関係なく、私の内側にそれらは確かに刻まれていくのだ。天気が優れない一日もあるだろう。足取りが重たい一日もあるだろう。どのような一日であっても、どのような足取りであっても、私は歩くことを止めはしない。私にできる唯一のことは、歩き続けることなのだ。それが自分の人生を生きることであり、この世界の中で生きることなのだ。

公園を抜ける頃には、私の身体状態は好転していた。私たちの身体は、まさにダイナミックシステムに他ならない。初期値がどのような値を取るかが、ダイナミックシステムの挙動を決定づけるのだが、今日の自分の身体状態を観察してみると、初期値からシステム全体の挙動を予測することは極めて難しいことがわかる。

いい意味で私は自分の予測を裏切られたのだ。今朝の優れない身体状態が、数時間以内にこのように好転するのを目撃すると、やはり私自身が常に外部環境と絶えずフィードバックを行い、それ

が私の身体状態に大きく左右していたのである。そして言うまでもなく、私の身体状態を好転させてくれたのが、フローニンゲンの環境だった。私はあと二年間ほどこの土地に留まり、二年後には別の国に行くことになることを予感している。その予感が訪れた時、この街を離れることが物寂しく感じた。しかし、そうした思いを抱えながら、歩き続けることが生きることなのだと思う。2017/5/9

1047. 有限なものの価値と真の無限性に向かって

私:「先生、おはようございます。」

クネン先生:「おはよう。どうぞ、中に入って。」

これは、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生とミーティングがある時にいつも最初に交わされる言葉のやり取りだ。このやり取りはとてもありふれたものなのだが、この言葉の交換を先生とするのもあとわずかとなった。

人間とは不思議なもので、有限なものが持つ有限性に真に気づくとき、初めてその尊さや価値に気づく。同時に私たちは不思議なもので、有限なものが有限であるということに気づかないまま日常を送ることを余儀なくされている。

この世界において、金融資産を含め、金銭に置き換えられる量的なものを無限に拡大させていくことを追い求めるような風潮が絶えず私たちの身にまとわりつこうとする。私たちは、そうした偽りの無限性を追い求めるのではなく、有限なものが持つ尊い有限性に常に自覚的になりながら生きることはできないのだろうか。また、有限な存在に対する尊重の念を持って、真に無限なもの、真に永遠なるものに向かいながら生きることはできないのだろうか。

それは夢物語であると言われるかもしれない。だが、私は今日のミーティングでのクネン先生との何気ないやり取りの中に、有限なものが持つ有限性の価値と、それが真に無限なる存在に向かっていく道を見たような気がした。

今日のミーティングはいつもと同じように、いや、いつも以上に議論が盛り上がった。普段は先生にワードで論文の原稿を送り、それに対してコメントをいただくという形式を取っている。今回は、ユト

レヒト大学への先生の出張に合わせて論文の原稿を送ったため、先生はパソコン上ではなく、プリントアウトした論文に直接コメントを記入してくれていた。それを見たとき、私は肉筆の重みを改めて感じた。

人間が手で書く文字には何かが宿る。その気づきは、歴然とした直接経験からもたらされたものであった。特に、プリントアウトした論文の裏面3ページを使って、先生が今後の私のさらなる研究に向けてのアイデアを図と文章を用いながら書き残してくれたものを見て、肉筆は何かを宿すのだと実感した。

クネン先生:「ヨウヘイ、それはユトレヒト行きの列車の中で知的好奇心に任せて筆を走らせたものよ。なので、今後の参考程度にしてもらえたらと思うわ(笑)」

その言葉を聞きながら、私は先生が書き留めた図と文章を食い入るように眺めていた。

私:「こ、これは面白い！このアイデアをもとにして論文を一つ、そして、こっちのアイデアをもとにして論文をもう一つ、さらに、僕が考えていたアイデアをもとにもう一本論文が書けそうですね。」

先生と私はその後しばらくの間、もうすぐ終わりを迎える修士論文から派生させた、近い将来に取り掛かりたい研究アイデアの話で盛り上がっていた。フローニンゲンに滞在する残りの二年間において、クネン先生と共同論文をできる限り執筆することができたらと思う。

私がこの土地にいることは有限であり、クネン先生と私の寿命も有限だ。だが、二人が残す仕事は、必ず無限性を帯びるのだ。これこそが、人間がなす仕事の本質だと思う。2017/5/9

1048. 構造主義と集合的な認識の枠組み

昨日、ジャン・ピアジェの“Structuralism (1968)”を読み終えた。本書の中でピアジェは、構造主義とは哲学思想でも教義でもなく、世界の一つの側面を捉えるための方法なのだ、ということを主張していた。また、ピアジェは本書を通じて、レヴィ=ストロースやフーコーを始め、様々な構造主義者の考え方を参照しながら、人間の知性の発達を説明するための新たな構造主義を確立しようとしていた

ことが伺えた。まさにピアジェの主張通り、構造主義とは随分と長い歴史を持っており、特定の思想や教義に還元できないものだと知る。

昨日の昼食時、私は何気なく食卓の窓から外を眺めていた。すると、犬の散歩をしている一人の中年男性の姿が見えた。飼い主と犬の様子を何気なく眺めていると、その犬がおもむろに立ち止まり、道端で糞をし始めた。その飼い主に目をやると、犬の方を見ることなく、進行方向に視線を向けながらその場に立っていた。

私はその様子を食卓の窓から凝視していた。犬が用事を済ませ、道端に置き去りにされた糞を思うと、それを見ていたこちらの方に罪悪感が湧いてきたが、飼い主は何事もなかったかのようにゆっくりとその場を去った。オランダに来てから気づいたが、こちらでは犬の糞を持ち帰る習慣がないらしい。オランダには、そうした習慣や法令がないのだろう。そのため、その飼い主は何の違和感もなくその場を立ち去ったのだと思う。

一方、その一部始終を見ていた私の方に罪悪感のような感情が湧いてきたことは面白い。おそらく、その出来事を見ていた時の私は、日本社会の習慣や法令という目には見えない認識の枠組みを活用していたようなのだ。まさに、私の認識の枠組みという構造が私の思考を規定し、それが感情にも影響を与えている。同時に、社会の習慣や法令というのもれっきとした構造であることが改めて理解された。

欧米での生活を通じて、日本で獲得した大きな認識の枠組みをこれまで見直す作業を続けてきたが、今回のような小さな認識の枠組みは、まだまだ見直す余地があることに気づかされる。それにしても、目には見えない個人的・集合的な認識の枠組みは、絵も言わせぬ強制力を持っていることに気づかされる。とりわけ、集合的に共有されている認識の枠組みという構造の力は巨大なものであり、それは私たち個人個人の認識のあり方を目には見えないところで縛っている。そして、構造の種類とその質いかんによって、それは集合意識を過度に縛るものとなり、それを堕落させる方向に導くことになりかねないことに対して、少しばかり恐ろしさを感じた。

集合的な意識の発達段階を特定するという表面的な分析よりも、集合意識がどのような思想によって呪縛され、それらがどのような構造的限界や盲点を持っているのかに自分の関心の目が向き始

© YOHEI KATO 2018

めている。しばらくは、ピアジェの書籍の中で取り上げられていた人物を中心に、ここで改めて社会的な認識の枠組みという構造について探究を深めていきたいと思う。2017/5/10

1049. 言語の彫琢と精神の陶冶へ向けて

今日は早朝から、様々な哲学書を横断的に読み進めていた。一冊の書籍を隅から隅まで読み進めるというよりも、その瞬間に立ち止まらざるをえない箇所を精読するというような態度でそれらの書籍と向き合っていた。カント、フィヒテ、シェリングの順番に彼らの代表的な書籍を歩いて行った。特に、フィヒテとシェリングの書籍（“The Science of Knowledge (1982)”と“System of Transcendental Idealism (1978)”）は、数年以内に必ず精読する日が来るだろう、という確信を得た。

両者の書籍には、私が依然として強い関心を持ち続ける意識の問題と主観性の問題、そして、知の体系化の問題が盛り込まれている。その後、ダイナミックシステム理論に関する書籍を読み始めたが、やはり私にとって、数学言語よりも哲学言語の体系が脆弱であることに気づく。

最近よく思うのだが、限りなく深い次元で彫琢された哲学言語は、数学言語よりも厳密なのではないだろうか。もしかすると、これが私にとって数学言語に対して感じる親しみやすさなのであって、逆に、哲学言語に対する親しみにくさなのかもしれないと思った。

毎日の習慣と化した、哲学書から数学書への移行を経て、「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースで取り上げられている論文を読み進めた。先ほど読み進めていた哲学書との落差に一瞬戸惑いながらも、論文の要旨とそれに対する自分なりの疑問点などをワードにまとめていた。このコースでは、各週に取り上げられる論文一本一本に対して、三つの要点と三つの疑問点を準備してくることが要求されており、クラスの開始前に無作為に三名ほどの受講生が選ばれ、クラスの前で簡単にプレゼンをすることが要求されている。

最初はなかなか面倒な課題だと思っていたが、毎週それに向けて準備をする中で、論文の読み方を再度考え直す素晴らしい機会となっていることに気づき始めた。本質的には、一つの論文を読むということは、一つの論文を書くということと同じぐらいに難しい。また、論文の価値を正確に評価し、建設的な批判を加えるということも同じぐらいに難しいことだ。

欧州で生活を開始した時ほどに強烈なものではないが、それでも私はほぼ毎日、自分が真に仕事を開始するための鍛錬が圧倒的に欠落していると痛感している。端的には、それらは知識体系の欠如であり、言葉を生み出すための筋力の欠如である。

知というものが何であり、それがどのように体系化されるのかという衝動的な関心があるがゆえに、私はそれらのテーマに関する哲学書にすがるが如く接近し、知の体系化のプロセスとメカニズムを記述した発達科学の専門書や論文を貪るように読もうとするのだろう。一方、言葉を生み出すための筋力についても、毎日頭の片隅で常に突破口を見出そうともがいている。英語と日本語を問わず、どのようにすれば、表現しようと意図するものを明確な言葉で表現することができるのか、という道を絶えず探っている。

いつも自分の言葉を眺めるにつけ、嫌悪感が生じ、その感情に絶えず苦しめられる。実は、この問題に関して、自分の内面の成熟がそれを解決する唯一の手段であることをすでにわかっている。そして、内面の成熟には長大な時間と忍耐が要求されることがわかっていながらも、それを直ちになんとかしようとする自己矛盾的な自分がいるのだ。そうした自分の有り様を見るにつけ、内面の成熟とはつくづく自己矛盾との対峙であり、自己との絶え間ざる格闘なのだと思う。

仮に、日記を毎日書くということが、自己矛盾との徹底的な対峙であり、自己との絶え間ぬ格闘を意味しているのであれば、これを長大な時間継続させた結果として、内面の成熟にはそれらが不可欠であったことが、後々思わぬ形で証明されるのではないか、という打算的な思いが自分の中にあるのを隠すことはできない。

私は、先人の幾人かが、まさに同じプロセスで内面の成熟を果たしたことを知っている。その過程と方法が普遍的なものなのかを検証するために、私は同じ道を辿ろうとしているのかもしれない。
日々、自分が用いる言語を絶えず磨き続けたいと思う。それが精神を陶冶する唯一の手段だろう。
2017/5/10

1050. 自分の言葉で文章を書くということ

いつものことだが、日記をいざ書き始めてみると、それは当初の意図とは全く違う方向に進んで行く。それは私自身が、書き留める内容を整理しないままに書き始めることが大きな理由の一つだろう。もう一つには、私たちの精神には、本質的に「回遊性」のような特徴があるのだと思う。

一方で、興味深いのは、当初の意図と逸れた方向で文章が展開していきながらも、最初に思い描いていた場所に到着しうる姿を目撃することがある。おそらくそこには、私たちの精神が持つ回遊性という特徴の他に、「回帰性」と呼べるような特徴があることに起因しているように思える。

先ほど、自分の日記の言葉の質感について考えることを余儀なくされていた。自分の日本語を磨くには長い時間がかかるのを承知であるが、それは徹底的に遂行させていかなければならない。自分が真の日本人となり、真の日本語を書く日は果てしなく遠い。そこに向けて、毎日文章を書き続けていきたいと思う。

自分の日本語の成熟度に対して否定的な見解を持つだけではなく、少しばかり自分が日記から得られる肯定的な側面にも着目をしていた。先日、日記を読み返していた時に、やはり過去の日記から励ましを受けることが度々あることに改めて気付かされた。この点については、以前から何度も指摘していることかもしれない。だが、これは何度強調しても強調しすぎることがないぐらいに、今の私の生活にとって重要なことである。

まさに、日記で綴られた自分の言葉は今の私の生活の糧となっているのだ。それは精神の糧であり、精神的な支柱である。また、日記から精神の治癒と浄化を得られることも度々ある。言葉というのは不思議であり、自分自身の言葉には不思議な力が秘められていると思わずにはいられない。

日記を書くということ、文章を書くということに関して、「書けば書くほど、病は深くなる。書くというのは、自殺的な行為である。だが、避けることのできない必然的な行為なのである。書くことにしか、私は興味がない」という、ハンガリーの作家アゴタ・クリストフの言葉が、妙に深く突き刺さる。

文章を書くというのは、表層的な精神的治癒をもたらすというよりも、病を極限まで深めることによってその病を乗り越えようとする行為に近いのかもしれない。人間の内面的成熟において死と再生が

必要であるという発達原理に則れば、クリストフの言葉は正鵠を射ている。自分の言葉で文章を書くということは、根本的に自殺行為であり、病を深めながらも、そこからの再生をもたらすものでなければならないのだと思う。2017/5/10

1051. 専門性の確立と日記についてて

浴槽にゆっくりと浸かることは不思議なもので、新たな考えをふともたらしてくれることがよくある。その日の夕方の仕事を終え、それまでの仕事の内容が整理され、仕事に関係のある新たな閃きが生まれることもあれば、仕事とは直接的に関係しないながらも、非常に大切な閃きを得ることがある。

先ほど入浴をしながらふと、自分の専門性について考えていた。実際に欧米の大学院でその道の権威である学者や研究者と交流をすると、自らの専門性を真に確立していく道は長く険しいことを思わされる。大学院で研究を続けていると、一つの領域の一つの分野で専門性を確立することすら、自己を課すほどの献身が求められることに否応なく気づかされる。人間発達という一つの幹を専門性に掲げていく際に、その幹を支える土壌がどれほど肥沃なものなのかが鍵を握っているのだが、その土壌の裾野は非常に広い。

今後の数年間において、やはり非線形ダイナミクスやダイナミックシステム理論を核とし、非線形時系列データの分析手法に習熟することと、発達心理学における理論的・思想的な領域で専門性を確立していくことが重要になるだろう。また、発達心理学を取り巻く理論的・思想的なテーマに付随して、教育哲学に関しても専門性を構築していければと思う。そのようなことを先ほどの入浴中に考えていた。

それらの土壌がある程度の形になるのは、十年ほどの時間が必要になるかもしれない。それでも、その時間をかけてそれらの領域と向かい合っていきたい。なぜなら、それらの領域はもはや自己と不可分であり、それらの土壌を肥沃なものにしていくというのは、自己の成熟に他ならないからである。

昨夜の就寝前、毎日書き残している日記がいかに些細なものであるかに考えを巡らせていた。以前、創造性に関するコースを履修していた際に、私たちは日々、様々な創造的アイデアを生み出しているのだが、それそのものに価値はないということを学んだ。重要なのは、アイデアの具現化であ

り、実行であるということが強調されていた。確かに、私が毎日書き残している日記というのも、私が日々考えたことや体験したことの備忘録でしかないため、取るに足らないものなのかもしれない。

だが、そこには創造性のかけらが常に眠っていることを忘れてはならないし、真実はそうしたガラクタの中にあるような気がするのだ。毎日毎日、自分に関する事柄を書き続けていると、少しずつ何かが開けてくる感覚があるのは、おそらくそのためだろう。仮に、日記そのものが持つアイデアに価値はなくても、日記を書くという行為そのものが、自己を真実に近づけるという実行に他ならないように思えて仕方ない。2017/5/10

【追記】

ヴァン・ゴッホが弟のテオに宛てた一連の手紙の意味と役割について考えてみなければならない。ゴッホは手紙の中で絵画制作に関する自らの思想と技術を言語化し、それらを絶えず育んでいくことを無意識的に行っていた。「日々書く」ことには途轍もない力が秘められていることを疑うことはもはやできない。いついかなる時も文章を書くという自分をより確固たるものとしたい。今、列車がアムステルダム・アムステル駅を出発した。アムステルダム:2018/6/2(土)10:31

1052.「情報肥満」と「前超の虚偽」

夕食後、再び仕事を再開させようとしたところ、この時間帯にもかかわらず、再び昨夜の夢について思考が飛び移っていた。昨夜は、夢の中で、顔の見えない人物から二つの問題について質問を受けていた。一つは、現代社会で多くの人々が患っている「肥満」という病についてである。これはもちろん、身体的な肥満を指しているのではない。

その人物の話をもとにすると、内側の「情報肥満」に対してどのように対処したらいいのか、ということだった。その人物の話を聞きながら、私たちの身体は物理的な制約がある以上、身体的な肥満には限度があるが、情報というのは物理的な制約が働かない以上、情報肥満に際限はない、ということを思った。これはある意味、恐ろしいことだと思う。私たちの内側には、気づかないうちに、消化されぬ脂肪のような情報が無限に固着し続けているのだ。

そして厄介なのは、こうした情報的な肥満は、身体的な肥満のように目に見えるものではないため、その病は進行し続けているにもかかわらず、多くの人たちはそれに気づけないということだ。食べ物を摂取することに関しては、限界効用が働き、ある一定程度の食べ物を摂取すると、私たちは満腹感を感じる。一方で、情報に関してはそのような限界効用が働かず、私たちは一つ一つの情報を消化していないにもかかわらず、絶えず次の情報を摂取しようとしてしまうのだ。その結果、情報的な肥満は進行し、情報が目には見えないという性質を持っているがゆえに、その症状は進行の一途を辿るのだ。

夢の中で、その人物に対して私が回答をしていたのは、情報肥満の進行を防ぎ、それを解消に向かわせるには、一つ一つの情報を自分に引き付ける形で骨身にしていくという態度が求められる、というような内容であった。夢の中では、非常に細かい具体的な実践を紹介していたように思うが、その中の一つに、私が極めて重要だと思うのは、文章を書くという非常に単純な実践だった。しかし、これは単純に思える実践なのだが、間違いなくほとんどの人は行わない実践であるという奇妙な性質を持っている。

書くという実践は、思考運動であり、なおかつ身体運動に他ならない。そうした運動特性を持つ書くという実践を通じて、内側に滞留している情報は徐々に血肉に変貌していくのだと思う。現代社会に蔓延する情報肥満というのは、書くという身体運動の欠如であり、それは同時に自分の頭で考えるという思考運動の欠如を物語っている気がしてならない。

もう一つ、夢の中の人物から質問を受けたのは、発達測定に関するものだった。具体的には、高次元の段階と低次元の段階を混同してしまう「前超の虚偽」をどのように見分けることができるのか、というものだった。

夢の中で私は、それを見極める最善の方法の一つは、発話者に質問を投げかけることである、と述べていた。その論理は、仮に高次元の段階に到達しているのであれば、与えられた質問に対して、その段階に基づいた回答を再び行うか、もしくは下の段階に基づいた回答を行えるはずであり、仮に高次元の段階を偽装しているのであれば、問いに対して何も回答することはできない、というものだ。

© YOHEI KATO 2018

説明を加えると、私たちは段階を飛ばすことができないという原理上、高次元の段階に到達している発話者は、追加の問い対して、その段階に留まった回答をするか、一段下がった回答をすることができるはずである。しかし、段階を偽装している場合、追加の問いに対して、何ら言葉を紡ぎ出すことができないという状況に陥る。

普段私たちは、高次元の段階から発せられたと思われるような言葉に対して麻痺をしてしまいがちである。その結果、追加の質問を投げかけられない状況に陥ってしまう。これまで発達測定を行ってきた経験上、高次元を装うような発話に出くわした時、それにひるむ必要は全くなく、むしろ純粋な質問を投げかけてみると、偽りの仮面が容易に露わになることが頻繁に起こる。

これは、一つ目の問題と関係しており、現代社会で蔓延している、自らの頭で考えることをせずに情報を無限に取り入れようとする態度に加え、問いを投げかけることができないという問題がそこに存在しているように思える。

他者に対して問いを投げかけることができず、自らに対して問いを投げかけることができないような状況が、私たちの社会を覆っているように思えて仕方ない。問いを立てるということ、自らの頭で考えることの最善の手段の一つとして、書くという実践がある、ということを夢の中で私は主張していた。それは今目覚めている私の主張でもある。2017/5/10

1053. 明瞭な意味と意義に向けて

雲ひとつない晴天の朝。春の穏やかな朝日が、新緑の木々に降り注いでいる。フローニンゲンもようやく暖かくなり始めた。今朝は起床直後から、身体が非常に軽く、質の高い睡眠が取れたことを知る。

今日から再び新しい一日を始めるにあたって、内面上の様々な課題を乗り越えていく必要があることに気づかされた。それらは、日々の仕事や生きることに直結する課題である。私は、欧州での生活を始めることによって、自分の仕事や生きることに関する意味をようやく掴みつつあった。しかし今の私は、やはりまだ完全にそれらの意味を掴んでいないようだ。あと少し、確信を超えるような確信が必要だ。

論文アドバイザーのサスキア・クネン先生と先日ミーティングをした際に、修士論文が落ち着いたら、その論文をもとに協働論文を執筆していこうという話になった。これはとても有り難いことである。本来であれば、私はフローニンゲン大学に到着した一年目から査読付き論文を執筆するはずであった。しかし、それができなかったのは何故なのだろうか。

それは一つには、自分の中で論文を書くことの意義と意味を完全に見出していなかったからだろう。仮に、論文を書くことの意義と意味を自分なりに明確にし、それが自分の真の仕事の一つになりうると確信したのであれば、抑えられない衝動に基づいて論文を執筆していたはずである。そのように考えると、一年目に査読付き論文を執筆することができなかった私は、まだ論文を執筆することの意義と意味を自分なりに明確にできていなかったことを物語っている。そして、状況は今も同じのようだ。

確かに、二年目も一年目と同様に、大学のカリキュラムに則りながらコースワークをこなしていく必要があるため、研究だけに没頭することはできない。しかしながら、没頭するしないにかかわらず、学術研究を行うことの意義と意味を自分なりに掴んでおかなければならないのだ。それができなければ、一生涯にわたってそれを自分の仕事にし、真の仕事にまで高めていくことなどできはないしだろう。そのようなことを考えながら、学術研究をするということ、そして、学術論文を書くことの本質的な意義と意味を完全に疑いようのないところまで明確なものとしたいという気持ちを改めて持った。

今日の早朝の空のように、雲ひとつなく、迷いなく、全てのものがそこに溶け込めるぐらいに透き通った明瞭な意味と意義を掴みたい。2017/5/11

1054. 学会と権威との向き合い方

先日、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生の研究室でミーティングをしている最中、何かのきっかけで、来年の五月末にアムステルダムで開催される「ジャン・ピアジェ学会」の話になった。私はこの学会の存在を知らなかったため、とても強い関心を持って先生の話に耳を傾けていた。なにやら今回の学会は、ダイナミックシステムアプローチを本格的に発達心理学の研究に適用したポール・ヴァン・ギアート教授や、ダイナミックシステム理論と発達心理学をメタ理論的な観点で研究しているデイヴィッド・ウェザリントン教授が主催者らしい。

クネン先生も過去何度かこの学会に参加しており、来年の学会にも参加するとのことである。ちょうど今年の学会は来月に迫っており、開催場所はサンフランシスコである。残念ながら、来月の学会には参加できないが、来年の学会には必ず参加しようと思う。先月の最初に、ザルツブルグで行われた非線形ダイナミクスに関する学会に参加した時、学会というのもは参加するだけでは全く意味がないということを改めて知った。

つまり、学会というのはそこで発表をし、発表を通じて他の研究者と意見交換や交流をしていくことが重要なのだ。ザルツブルグの学会には、私よりも若い二人のオランダ人が、自分の研究内容をその場にいた多数の権威たちに臆することなく発表していた姿が印象に残っている。

次回のジャン・ピアジェ学会では、ぜひとも自分の研究内容を発表したいと思う。学会というのは不思議な空間であり、そこで取り交わされる言葉は専門的であるがゆえに特殊に響くのだが、何とも言えないような高揚感がある。それは一つに、歴史のある学会には、その領域に関する専門家の中の真の専門家がそこに集うということが挙げられる。前回のザルツブルグの学会でも、まさにその道に習熟した真の専門家が集い、私は多くのことを学ばされた。

学会に参加する権威との関係性ついて少しばかり考えていると、先日偶然にもフローニンゲン大学の社会科学のキャンパスで手に取った一冊の本の存在を思い出した。それは、“Authority, Responsibility, and Education (1959)”という本だった。この書籍は、無料で持ち帰ることのできる棚に置かれていたものであり、タイトルを見たとき、私は強い関心をこの書籍に示した。ちょうどその日あたりに、夢の中で権威的な人物に対して攻撃性を発揮することがあり、自分と権威的な存在との関係性に関して、まだ何かしこりのようなものがある気がしていた。

私が夢の中で権威的な人物に対して攻撃性を発揮することは頻繁にあり、ここに自分の巨大なシャドーが横たわっている気がしてならない。このシャドーの根源は、おおよそどのようなものなのか見当がつくが、その根源に立ち返ってこのシャドーと向き合う必要があるだろう。

学会へ参加する意義と意味、学会への参加の仕方、さらには、権威との関係性について、明らかにしなければならないことがまだまだ沢山ある。2017/5/11

【追記】

上記の日記で書き留めているように、私はこの三日間、国際ジャン・ピアジェ学会に参加した。まさにこの日記で指摘しているように、発表者として学会に参加することができた。日記の最後で言及している学会へ参加する意義と意味について新たなものを見出せたことは本当に幸運だった。

それは、学会に参加することはもはや自分にとって時間の無駄であるということだ。今月末にロンドンで行われる学会をキャンセルしようと思う。今はもう学会に参加する意義を見出すことはできない。学会にせっせと出かけて行き、自分の時間を無駄にするような馬鹿なことはもうやめにしようと思う。学会に参加しないという新たな参加の方法を見出すことができて今はとても嬉しい。ユトレヒト駅：2018/6/2（土）10:54

1055. 春のとある一日から

今日の午前中から、哲学者のイヴァン・イリッチが執筆した“Deschooling Society (1970)”を読み始めた。本書は、一昨年、東京に滞在していた時に購入したものであり、今に至るまで一読もしていなかった。発達科学の探究に並行して、私の関心は教育思想や教育制度にも及び始めている。一昨年に本書を購入していた時から、そうした関心の芽が出かかっていたようだ。

早朝から本書を読み進め、半分弱を読み終えた。イリッチは本書の中で、「脱学校化（deschooling）」という概念を提唱し、現代社会の教育制度のみならず、産業社会のあり方そのものを批判的に検証しながら、その概念の意味とそれを遂行させていくことの重要性を説いている。

半分弱を読み終えた段階で、かなり多くの書き込みを本書に行った。それは、本書の内容が私の関心事項に大きく合致していることを示しているのだが、いざ本書の内容について何かを書き留めようと思うと、何から書いていいのかわからないほど思考が整理されていない。本書には、それほどまでに、私がこれから考えを深めていきたいと思う論点が多々あり、同時に、それらはまだ自分の中で熟していないのだということを知る。明日も残り半分を読み進め、一言二言でも何かを書き留めておきたい。

イリッチの書籍を読んだ後に、私は部屋を掃除し、昼食前にランニングに出かけた。今日は本当にランニング日和だった。近くの河川敷のサイクリングロードを走るのではなく、ノーダープラントソン公園の中を走ることにした。極めて爽快な気分のまま公園に到着してみると、何人かの人たちが芝生に寝っ転がり、日光浴をしていた。

また、公園の木陰のベンチで読書をしている人たちを何人か見かけた。どの人たちもそれぞれに幸福を感じているように私には思えた。公園に茂る木々の脇を通った時、差し込む木漏れ日に心が洗われるような気持ちになった。その時私は、「毎日は勤労日であり休日でなければならない」と思った。

特にこの数年間、私は毎日が勤労日かつ休日のように過ごすように努めてきた。仕事も休みも、それらが分離した形ではなく、調和した形で一日を過ごすこと。それが人間として生きることの大切な条件であるように思うのだ。そのため、私の毎日は、もはや勤労と休息の区別はない。今日、近所の公園を走ったことも、私にとっては勤労であり休息であった。毎日の全ての行為を、勤労と休息の区別を超えたところから営むこと。それが私にとっての生きることなのだ、ということに改めて気付かされる。

木漏れ日が差し込む木々の間を抜けて、公園を横切る道路を横断しようとした時、自転車を運転する一人の女性が、道端に花束を落とした。私はすぐそばにいたため、花束を拾い、その女性に手渡した。女性からお礼の言葉をもらい、私は短い言葉を返した。人との何気ないやり取りの中に、幸福の種が宿っていることをここでも実感した。

ランニングから自宅に帰る途中で、近所のスーパーに立ち寄った。明日から三日間ほど天気が崩れるため、三日分の食料を買い、その間は外出しないで済むようにしようと思った。ただし、日曜日の夜は、中国人の友人であるシェンと日本食レストランで夕食を共にする約束になっている。中国に一時帰国していたシェンが、孔子の『論語』の原著を私のために持ち帰ってきてくれた。

そのお礼として、私はシェンを夕食に誘っていたのだ。日曜日の夕食時、中国の思想家について、またあれこれとシェンに質問をし、彼から話を聞くのが楽しみだ。2017/5/11

1056. 楽譜の到着と今後の研究へ向けて

昼食前にランニングを済ませ、自宅の前に戻ってきた時、隣の棟に住む老父婦が私に声をかけてきた。なにやら、私宛に郵便物が届いているとのことであった。オランダでは、郵便物の受け取り主が不在の場合、近所の人がそれを受け取ることになっている。奥さんから郵便物を受け取った時、見た目の大きさから判断して、それがベートーヴェンのピアノソナタ全曲の楽譜であることがわかった。

私は奥さんにお礼を述べ、自宅に戻ってすぐさま梱包を紐解いた。中身はやはりベートーヴェンの楽譜であった。はるばるイギリスから届いた楽譜に私はしばらく見入っていた。文字どおり、ベートーヴェンが産み出した32曲のピアノソナタが全て収められているため、分量は700ページほどに及ぶ。本の綴じ方もリング式だ。リングのおかげで、楽譜の開閉がとても楽だ。

私は早速、楽譜を書見台に乗せながら、ベートーヴェンのピアノソナタを聴いていた。楽譜を眺め、音符を追いかけながら曲を聴くことは精聴につながり、それはこれまで漠然と聴いていた時とは違う発見を私にもたらした。やはり、一つの楽曲は一枚の絵画作品なのだ、とつくづく思った。

自分でも思わず笑いがこぼれたのは、いかんせん楽譜の読み方がわからないため、流れてくる音と目で追いかける楽譜が対応しないことだった。それでも、私は小さく、それでいて凝縮された幸福感を感じながら、絵画的な楽譜を眺め、しばらく曲に聴き入っていた。楽譜の到着を持ってして、ベートーヴェンが残したピアノソナタ全曲を貫く非線形的な発達過程と、それらが一つの美的体系へと至るプロセスに関する研究に向けた材料の大部分が得られたと思った。

将来的には、ベートーヴェンの思想体系の発達と曲の美的体系の成熟とを関連付けた研究にも着手したい。直近は、非線形ダイナミクスの専門家であるラルフ・コックス教授から指導を受け、楽曲の非線形的発達過程を明らかする研究に着手する予定だ。また、その研究と同時並行で、成人学習や成人発達に関する研究論文を執筆していくことを行っていく。論文アドバイザーのサスキア・クネン先生に引き続き師事し、修士論文をもとにそこから数本ほど査読付き論文を執筆していく。

フローニンゲン大学での二年目、三年目の生活のあり方をここでもう一度見つめ直したい。三年目は完全に研究だけに打ち込む時期にする予定なのだが、二年目はどうしてもカリキュラムに従って

いく必要がある。だが、コースワークの課題量がいかほどであっても、必ず毎日論文を書き進めていくという姿勢は譲れない。「人間発達」という意味が全く見えてこないのは、そして、その定義が自分の中にないのは、人間発達に関する真の探究が自分の中で進んでいないからに他ならない。

定義というのは辞書の中になどないのだ。定義は、その対象と真に向き合う仕事を推し進めていく中で、対象と真摯に向き合う自己から自ずと滲み出てくるものなのだ。そこに向かうために不必要なものを生活の中から排除し、規律と克己の中で毎日を形づくっていきたい。そのように強く思う。
2017/5/11

1057. 筆写と投影

昨日から突如として、書籍や論文、そしてノートに書き込むメモの量が増えた。特に、書籍の余白やノートに書き込む際のメモの形態が、単純な文章の形ではなく、図表などの視覚的な形に変化し始めた。これは自分が後からメモを読み返す際に、図表の形で残っている方が直感的に理解しやすいという無意識的な思いと関係しているかもしれない。また、このひと月以内に作曲を始めたことに伴い、自然言語のみならず、音楽言語を含めた他の言語形式で内側の現象を外側に形として表現しようとする意思と関係しているかもしれない。

いずれにせよ、書籍や論文、さらにはノートへの今後の書き込みに際して、図表が無意識的に増えていくだろうし、また意識的にそれを増やそうと思う。そして、今日から再び文章の書き写しの習慣が始まった。この習慣は、私が米国に渡って以降、六年近く続けていたものだったのだが、直近のひと月にはその習慣をあえて行っていなかった。だが、今朝から少しばかり時間を取り、筆写を行う習慣を再開させた。

今日から、イマニュエル・カントの“Critique of Pure Reason (1781)”を最初のページから筆写し始めた。なぜカントを選び、なぜこの書籍を選んだのかは定かではない。だが、直感的にこの書籍しかないという思いがあったのは確かだ。毎日一ページずつ筆写していくと、全てを書き写すのに一年半ほどの時間がかかるだろう。どれだけ時間がかかるかは全く問題ではなく、それをやろうと思った自らの意思を尊重したい。また、この習慣を通じてもたらされる規律と克己を大切にしたい。

昨夜就寝に向けて準備をしている最中、ふと、書籍というのは著者の心理的な投影が色濃く現れるものだと思った。それは否定的な意味ではない。むしろ、そうした書籍の中に著者の独自性や実存性が反映されており、それこそが読むべき本としての資格を与えるような気がするのだ。当然ながら、著者が自身の心理的な投影を冷静に捉えた上で、その書籍を執筆していることが大前提である。

自らの心理的な投影に気づかないまま記された書籍は、独断的なものになりやすく、ひどく偏向的だ。今回の第二弾の書籍の中に、私自身のどのような心理的投影があったかをもう一度考えていた。大きなものは、自らの不勉強さと精神の鍛錬不足に関するものだろう。毎日、自らの不勉強さを嘆き、いかにすれば精神が鍛錬されていくのかを、藁にもすがるような思いでその方法を手探りで求めている自分がいる。

就寝前、祈りにも似たような気持ちで考えるのはそのことばかりだ。こうした個人的な問題が起点となり、それを社会の不勉強さや精神の鍛錬不足に投影する形で問題提起をしたのが今回の書籍の一部の姿だと思う。昨夜も、新たな知識を一つ獲得することよりも、既存の知識がさらに一段深くなることを静かに祈って眠りについた。2017/5/12

1058. これまでの七年間の回想

昨夜、就寝に向かう前に本棚の前を横切った時、二人の著者の書籍に思わず目を止めた。一人目の著者は、ケン・ウィルバーである。中でも、“Sex, Ecology, Spirituality (2000)”と“One Taste (2000)”の二冊が奇妙なほどに気にかかり、寝る直前だったにもかかわらず、思わず書籍を開き、薄明かりが照らされた食卓の上でそれらの書籍を読み始めた。

前者の書籍は、邦訳『進化の構造』で知られる哲学書であり、850ページほどに及ぶ大著だ。本書は間違いなくウィルバーの最高傑作であり、私はこれまで何度この書籍を読み返したかわからない。何度読み返しても、全く読みが足りないほどに、この書籍で開示されている思想は深い。思い起こせば、この書籍を購入したのは、私がまだ大阪で働いていた時だった。

それはもう、今から七年ほど昔のことになる。当時は、国際税務コンサルティングの仕事に従事し、週末にこの書籍を開いては閉じ、開いては閉じ、ということを繰り返していたことが、今となってはとても懐かしい。あの時の私は、英語という言語のみならず、この書籍の中で開示されている言語が

ほとんどわからず、本書の内容など一切理解していなかったように思う。昨夜、薄明かりの中で本書を読み返していると、七年前から今に至る自分の歩みの全てがこの書籍の中に刻み込まれているような気がした。

ここから再び歩くためには、再度この書籍を読み返す必要があるだろう。近々、読み込みが浅いと思われる第二部から読み返したい。二冊目の書籍も日本語に訳されており、それは『ワン・テイスト』という名前で親しまれている。こちらは、ウィルバーが自身の精神的な探究と哲学的な探究の過程を綴った日記である。

昨日、辻邦生先生と森有正先生の日記を読み返していたこともあり、ウィルバーの日記にも彼ら二人の日本人と似たような、真実を探究する姿勢やそうした探究を余儀なくされた宿命のようなものが色濃く立ち込めている。真実の中を生き抜くことを余儀なくされた人たちの日記には、固有の実存性と呼んでいいような独特なものが梱包されている。その梱包を紐解き、彼らの日記の中に知らず知らずのうちに入り込んでいたのが、昨日の私の姿であった。

学術論文にも筋書きがあり、小説は物語に他ならないのだが、日記には論文の筋書きや小説の物語を遥かに凌駕するようなストーリーがある。一人の人間が生きるということそのものが、一つの大きなストーリーであり、そして、そのストーリーは開かれたものとして日々成熟の方向に向けて進んで行くことを思わずにはいらなかった。

やはり私にとって、真実に生きた人の生き様が手に取る形で明らかに開示される、日記という表現形態には強く惹かれるものがある。そのようなことを思いながら、私の視線は本棚の別の箇所に向かい、私が留学したジョン・エフ・ケネディ大学に在籍するクリスチャン・デ・クィンシー教授の“Radical Knowing (2005)”という書籍に視線が移っていた。

この書籍も、先ほどのウィルバーの書籍と同様に、今から七年前に購入したものだ。特に、この本との出会いは少し特別な思い出として私の中に残っている。七年前の夏、私は会社の夏季休暇を利用して、サンフランシスコに飛び立った。それはもちろん、ジョン・エフ・ケネディ大学の下見に行くためだった。

大学の下見を終え、サンフランシスコ市内を訪れた時、本書との出会いがあった。当時ユニオンスクウェアの近くにあった今はなきバーンズ・アンド・ノーブルに立ち寄った際、哲学書コーナーで偶然にも本書を発見した。

本書の裏面を見ると、著者がジョン・エフ・ケネディ大学で「心の哲学」を担当していることを知った。中身を確認し、とても興味深い書籍だと思い、即座に購入を決意したことを今でも覚えている。また、本書に合わせて禅の思想書をレジに持って行った時、レジ係の男性が、私に鈴木俊隆老師の書籍を読むことを勧めてくれ、レシートの裏に書籍のタイトルを書き留めてくれたことがとても懐かしい思い出として残っている。

それから七年が経った。この七年という月日は、私にとってとても掛け替えのないものであったように思う。その月日で積み上げてきたことは、今の仕事の土台となっていることは間違いない。この土台を無限に肥沃な土壌と変え、その上にこれからの仕事を植えていけるように、今日から再び少しずつ前に進みたいと思う。2017/5/12

1059. 自己の基底

激しい雨が書斎の窓に打ち付けている。外の景色が見えないほどに、激しい雨滴が空から降ってきた。思い起こせば、今日は早朝から雲行きが怪しく、雨が降りそうな予感がしていた。午前中、まばらな雨が降ったが、特段気にかけるような雨でもなく、それは止み、昼食時には少しばかり晴れ間が広がった。だが、午後から天候が一変し、激しい雨が辺りを襲った。その激しい雨は、今のこの瞬間の私の内側の不気味な気持ちと合致していた。

今の私の気持ちは、否定的な世界に所属するものであることは間違いないのだが、それは決して重々しいものでもなく、また、破壊的なものでもない。何かが抜き取られてしまったかのような、透明な否定性の感情としてそこにある。

人生に占める国外で過ごす滞在年数について何気なく考えていた。あと少しすると、六年目の海外生活が始まることになる。当たり前のことなのだが、国外での生活と自分の人生を並行させていけば、人生に占める国外で過ごす滞在年数は増加していく。今、私は自分の人生の五分の一を国外で過ごしていることにはたと気づかされた。

オランダでの滞在が終わるであろう二年後には、人生の四分の一を母国ではない場所で過ごしていたことになる。これからどれほどの期間を国外で過ごすのかわからない。一つ言えることは、望むと望まぬとにかかわらず、私はそこを通っていかなければならないのだ。内側の不気味な気持ちと同居しているのは、東洋思想、とりわけ日本の思想を骨の髄から学びたい、という熱烈な気持ちである。

私の内側に、東洋思想、特に日本古来の思想を捉えたいという、抑えがたい気持ちの芽生えのようなものが以前からあったのは知っている。しかし、かつてなかったほどに、その気持ちがうごめき始めているのだ。それは、国外での生活が一年、また一年と重なっていくのに呼応して、少しずつその存在感を強めている。そしてそれは、私が私として存在することを確証付けるには、日本古来の思想の中に分け入ってかなければならない、という思いに根付いたものであるとも言える。

毎日毎日、異国の言語を読み、書くことを絶えず行う中で、日本に帰らなければならないことを知る。それは、物理的に日本に帰ることを意味するのではなく、精神的に日本に帰ることを意味する。

今朝、原著がドイツ語のものを英語で読み、これから英語で論文を書こうとする自分がいた。私の生活は、毎日、母国語ではない専門書と論文によって形作られていると言っても過言ではない。こうした生活は、私が最も望む生活の形であった。また、母国語から極力離れたところで別の精神空間を形作ることは、今でも自分が保持したいと思う大切なことである。

母国語ではない言語空間で精神生活を形作ることは、私の人生の中で今後一生続くだろう。ここで一つ、大きなことに気づかされた。

それは、精神生活を新たに形作ろうと意識しようとしまいとにかかわらず、不可避的に新たな精神生活が立ち現れるという事実であった。言い換えると、それは自分の存在を疑う際に、自己の存在を疑える限界領域の近くに存在している何かである、ということにはたと気づかされたのだ。それは紛れもなく、一人の人間が背負った何かであることを疑うことができなかった。激しい雨を見ている最中、私を取り巻いていた不気味気な感覚の正体はこれだったのだろう。

それはもはや不気味な感覚と呼ぶよりも、自分の存在から切り離したくても切り離すことができない存在が生み出す感覚であるがゆえに、自己の基底に触れた感覚と表現した方がいいかもしれない。

© YOHEI KATO 2018

疑っても疑いきれない何か、自己から切り離そうとしてもそれができない何か、それこそが、自分という一人の人間を根底から定義づけるもののように思えた。

怒号を伴う激しい雨が通り過ぎ、窓の外の通りには、通行人の姿が見えた。そして、小鳥の鳴き声が辺りに響いている。2017/5/12

1060.「永遠が作る回帰の道」と「回帰が作る永遠の道」

今日は午前中から、無性に昔のことを振り返っていた。昔といっても、ここ七年間ぐらいの話だ。この期間について自分がやたらと回想することが多いのは、それが私の人生の中でも大きな意味を持っていたからだろう。この七年間のうち、六年ほどが日本の外で形作られたものである。

この七年間を振り返りながら、やはり自分がまだ何もわかっていないということを痛いほど思い知らされる。七年前と現在を並べてみるならば、確かに私は何かが見え始めているのかもしれない。だが、それは極めて些細なことであり、見えるであろう事柄のほんの一握りの部分でしかないことを日々痛感している。学ぶということは恐ろしく、何かを学べば学ぶほど、自分は何も知らないということが徐々に明るみになってくる。

学ぶということが、決して知識の拡張などではないことがここからも明らかだ。学ぶことは、知ろうとする事柄に近づいていくことではなく、それとの絶望的な距離を思い知らされる過程なのだと思う。これは決して、学ぶことに伴って、自分の無知さに気づかされるという呑気な事柄を意味しない。無知は人間の本質であり、自分の無知さをなんともすることはできないという諦念を持ちながら、それでも歩かなければならないという意志を喚起し、実際に歩き続けることが、学ぶことの本質にあるような気がしてならない。

先ほど考えずにはいられなかった、自己の存在の基底にある母国語の言語空間と同様に、無知に対する諦念からの歩みというのは、私にとってとても大切な事柄のように思われる。激しい雨が通り去った後の景色をぼんやりと眺めていると、先ほどの主題と間接的に関係したテーマに思いを巡らせていた。

それは、「回帰」という事柄だ。先日読み終えたジル・ドゥルーズの書籍の中に、「永遠が作る回帰の道」と「回帰が作り出す永遠の道」の二つがあるというような指摘がなされていた。これはとりわけ私が興味深いと思ったものである。私は近頃、自分が何か巨大なものに近づこうとしているという感覚と同時に、その巨大な何かが自分に近づいてこようとしているという感覚を持っていた。

これらは逆方向のベクトルを持ち、同時に、それらは繋がっている。これらの感覚と、ドゥルーズが言わんとしている二つの回帰の道が無性に重なって見えたのだ。つまり、私は時折、永遠が作る回帰の道と回帰が作る永遠の道の双方を歩いているような感覚がするのだ。

昨日、非線形ダイナミクスに関する応用数学の専門書を読んでいた時、そこに記述されている内容から飛躍して、ポアンカレの回帰定理に考えが飛び移った。その瞬間、嬉々とした戦慄が背筋を走った。

ポアンカレの回帰定理は、ダイナミックシステムが時間の経過に応じて、出発点に近い位置に無限回戻ってくる現象を説明する。要点は、出発点に戻ってくるのではなく、出発点に近い位置に無限回戻ってきながらダイナミックシステムは運動するのである。つまり回帰とは、同一のものへ戻っていくことを指すのではなく、同一のものへ戻っていく装いの中で、差異を生み出す運動のことを指すのだ。これは発達の肝である、と自分の直接経験から直感的にわかった。

それは、嬉々とした戦慄を伴う理解であった。東洋思想、とりわけ日本古来の思想に帰ろうとする私は、永遠が作る回帰の道と回帰が作る永遠の道の双方の上にいるのだとわかる。「歩く」というのは、現在の自己の近郊点に戻り続けながらも、絶えず異なる場所を踏みながら、これらの道の上を進んでいくことを意味するのだろう。2017/5/12